

氏名	池松 玲子
学位の種類	博士（生涯人間科学）
学位記番号	甲第生8号
学位授与年月日	2019（令和元）年9月23日
学位授与の要件	東京女子大学学位規程第3条第3項第1号
学位論文題目	主婦を問い直した女性たち — 投稿誌『わいふ/Wife』の軌跡にみる戦後フェミニズム運動の一断面 — ( The Housewife Questioned : The Trajectory of the Contribution Magazine “Waihu/Wife” as a Feminist Movement in Post-War Japan )
論文審査委員	主査 教授 金野 美奈子 副査 教授 上野 加代子 副査 教授 栗田 啓子 副査 和光大学名誉教授 井上 輝子 副査 武蔵大学名誉教授 国広 陽子

## 内容の要旨および審査の結果の要旨

### I. 論文内容の要旨

本論文は、草の根女性運動としての投稿誌『わいふ』の活動に着目し、高度成長期以降の日本で、主婦当事者である女性たちに主婦というあり方を相対化するメッセージがいかにかえられていったかを明らかにすることを通じて、戦後フェミニズム運動の展開に関する新たな視点を提示するものである。

戦後日本社会が経験してきたさまざまな変化の中でも、女性をめぐる変化はもっとも大きなもののひとつである。主婦という役割への社会的視点が根本的に変化したことは、

その代表的表れといえる。高度成長期には家族や社会を家庭内から支える要として女性役割の規範的モデルとされた主婦は、1990年代までには何らかの正当化が求められる存在、つねに反照的に問われねばならない存在へと変化した。この大きな社会意識変容の過程を十全に解明するには、主婦当事者である女性たちに対して「主婦を問う」視点の幅広い浸透を積極的に促した動きに関する理解が欠かせないが、従来の研究ではそのようなミクロな動きが十分明らかにされてきたとはいえない。

本論文は投稿誌という会員制メディアの役割に注目することで、研究上の欠落を補う試みである。投稿誌は、実生活では直接共有されにくい個々の生活実態や思いを会員自らが綴り、互いに読み合う過程を媒介するメディアであり、反照的自己意識の浸透過程の解明という問題意識からみてきわめて興味深い対象といえる。なかでも、本論文は宝塚市の主婦たちによって1963年に創刊され、その後活動拠点を移して全国に会員を増やし今日まで継続する『わいふ/Wife』に焦点を当てる。創刊から現在までの同誌各号、編集部へのインタビュー調査、会員への質問紙およびインタビュー調査から得られたデータを中心に、調査協力者から提供を受けた内部資料、編集部出版の書籍類、新聞記事を含む多岐にわたる素材をもとに、主婦当事者である女性たち、とりわけ専業主婦ライフスタイルの中核的担い手となってきた中流層に主婦を相対化する視点がいかに伝えられたのか、また、外面的にもアイデンティティの上でも主婦であり続ける女性たちの内にも、主婦としての自らを問う態度がいかに共有されていったのかが、同誌編集部と会員女性双方の視点から描かれる。

分析により、明示的にフェミニズムを掲げたわけではない同誌がむしろ、個の自覚という実質的なフェミニズムのメッセージをより広い意識層の女性たちに、かつ一定の深さをもって伝える回路となりえていたことが示される。特定の政治的主張ではなく生活のリアリティを伝え合う場という同誌の自己規定、主張内容や文章の巧拙で投稿を選別しない編集方針、女性たちの実際的なニーズにも訴える会員勧誘、大手メディアとの意図せざる連携等が同誌のリーチを支えるとともに、投稿内容の多様性、共感や非断定性・差異の受容を重んじるコミュニケーション様式、継時的に展開される誌上論争というフォーマットを巧みに用いた編集部からの働きかけ等が、投稿者／読者である女性たちへの深いインパクトを導いた。これらの特徴が、中核を担った編集者らの個人的背景、試行錯誤や活動の蓄積的効果、時代の社会経済状況との結びつき等により次第に明確化されていく過程が、本論文から浮かび上がる。

結論として、このような『わいふ』誌の活動を広義のフェミニズム運動と位置付ける、戦後日本における女性運動の布置をめぐる新たな見方が提示される。

## II. 審査の結果の要旨

### 1. 論文の構成

本論文は、独自の時期区分による時系列におおむね基づく 11 章から構成される。まず編集部の変遷を主な基準として 1963 年の創刊から現在に至る『わいふ』誌の活動が 3 期に区分され、論文の問題意識に即して、このうち同誌最盛期にもあたる第 2 期(1976～2006 年)にとくに焦点が当てられる。第 2 期はさらに会員数の動向を主な指標に 3 つの期(「助走期 1976-1979 年」、「拡大期 1980-1994 年」、「成熟期 1995-2006 年」)に区分され、それぞれ「人・活動・組織」および「紙面・内容・言説」の 2 つの観点から論述される(第 3 章～第 8 章)。その後、会員女性の視点からみた『わいふ』誌の意味を改めて考察する章が置かれる(第 9 章)。

序章では研究目的と問題意識が述べられた後、主婦を相対化する当事者運動研究の文脈における本論文の位置づけが確認され、研究対象、研究方法、時期区分と分析の観点提示される。第 1 章(「主婦の投稿誌というメディア——研究対象としての『わいふ/Wife』の位置付け」)では、同時期他誌との比較から、本論文の問題意識に照らした『わいふ』研究の意義が説明されるほか、第 2 章以下の記述の前提となる基本的情報が述べられる。第 2 章(「『わいふ』の誕生——草創期のもった意味」)では、主婦のメディアとしての『わいふ』創刊の経緯と目的、第 1 期の活動状況が主にインタビュー調査に基づいて述べられ、第 2 期『わいふ』がどのような遺産の上に出発したのかが確認される。

第 3 章(「主婦を問い始めた女性たち——助走期の人・活動・組織」)からが論文の中核となる。第 3 章では、第 2 期編集長、副編集長への詳細なライフストーリー・インタビューに主に基づき、この期の活動の中心を担った 2 人にとって『わいふ』のもった意味が明らかにされる。第 4 章(「『養われる主婦』という問い——助走期の紙面・内容・言説」)では、この期の同誌が何をどう伝えたのかが、主に主婦という立場をめぐる誌上論争の分析を基に述べられる。

第 5 章(「飛躍的発展の要因とその時代背景——拡大期の人・活動・組織」)では、会員数が飛躍的に伸びた背景要因が、時代背景、組織要因、編集部内の役割分担や人間関

係、編集方針、会員勧誘等の観点から、インタビューデータおよび各種資料を用いて多角的に考察される。第6章（「『主婦の逆襲』と投稿の質的变化——拡大期の紙面・内容・言説」）では、この期の同誌主婦論争や特徴的な投稿、表紙・目次・広告の分析等から、この期の紙面が伝えた内容および助走期からの継続性と変化が示される。

第7章（「多角化する活動の意味——成熟期の人・活動・組織」）では、会員数の緩やかな減少と並行して進んだ活動の多角化状況、また多角化が編集部や編集者にとってもった戦略的な意味が、インタビューデータおよび各種資料の分析から明らかにされる。第8章（「多様化する経験表象——成熟期の紙面・内容・言説」）では、この期に同誌が何をどう伝えたかが分析されるとともに、論点やコミュニケーション様式の観点から、助走期からの変化が考察される。

第9章（「会員にとっての『わいふ』——「主婦を問う」態度はいかに伝わったか」）では、主婦を問うという態度が会員女性たちにいかに伝わったかが、会員へのインタビューおよび第2期最終号の特集投稿の分析に基づき改めて検討される。

終章（「主婦を問い直した女性たちのフェミニズム」）では、本論文の知見を踏まえ、運動としての『わいふ』誌がリーチとインパクトを一定程度両立しえた諸要因が考察されるとともに、その活動を広義のフェミニズム運動とみなしうるものが論じられ、戦後の女性運動の布置をめぐる新たな見方が提示される。

## 2. 論文の特徴

本論文の主な特徴として以下の点を挙げることができる。第1に、主婦役割をめぐる意識変容過程の解明にあたってきわめて興味深い対象でありながら、従来ほとんど見過ごされてきた対象を掘り起こし、他誌との比較、大手メディア上の識者による言説等との比較を交えてその重要性を示したことである。

第2に、叙述を裏付けるデータの豊かさである。創刊号からの300号を超える『わいふ/Wife』誌、第2期編集長、副編集長を中心とする同誌編集部および関係者への繰り返しインデプスインタビュー（8名、延べ18回、計40時間余）、会員への質問紙調査（126票）およびインデプスインタビュー（17名、計40時間余）を中心に、内部資料を含む多角的かつ厚みのあるデータ・資料に基づき、質的・量的方法を交えた分析によって多くの興味深い事実を見出し説得力ある議論を展開している。分析手法についても誌上論争の展開過程の分析等で独創的な工夫がみられる。

第3に、運動のリーチとインパクトの概念を用いて独自の類型枠組みを構築し、主婦の相対化を促した当事者運動を3類型（主婦役割を拡大する「脱・専業主婦運動」、主婦役割を否定する「反・主婦運動」、主婦役割を見直す「主婦問い直し運動」）に整理することで、女性運動・フェミニズム運動の展開をめぐる理解に新たな視点をもたらしたことである。

### 3. 論文の評価

明確な問題意識のもと独創的な研究テーマに取り組んだ。主婦当事者運動に関する独自の類型枠組みに基づく先行研究の整理は有意義であり、研究の位置付けも明確である。多角的で豊かなデータを的確に用い、論旨明瞭で説得的な議論を展開できている。興味深い事実発見や独創的な分析手法、フェミニズム運動の布置に関する新たな視点は、女性運動研究・フェミニズム研究への大きな貢献であるだけでなく、関連分野の研究にも示唆を与えるものである。文章表現も優れており読みやすく、論文の体裁面も丁寧に仕上げられている。

他方、惜しまれる点としては、活動の中核を担った編集部とその周辺の動向に関する叙述の厚みに比べ、紙面分析、会員分析における掘り下げがやや弱い点、運動様態に関する明快な図式的整理の一方、マイクロ経験の多様なリアリティを把握する上でのその功罪についての省察がやや甘く、資料やデータ解釈にも部分的に影響を与えていると思われる点がある。『わいふ』誌の活動が直接の会員を超えて持ちえた影響力についても一層の検討を要する。これらの課題は残るが、全体として、新たな学術的貢献をなす論文として高く評価できる。

### 4. 最終試験の概要

最終試験に先立ち筆頭形式による外国語試験（英語）を行い、水準を満たす外国語能力を有することを確認した。最終試験は発表会形式で7月6日に行われ、40分のおよくまとまった論文プレゼンテーションの後、発見事実やデータの解釈、研究手法や使用概念、研究の意義と限界等に関して50分間の質疑応答がなされた。質問にはいずれも十分な理解が示され、おおむね適切な応答がなされるとともに、いくつかの点については今後の課題として確認され、一定の展望が示された。

以上の論文審査および最終試験の結果、審査委員の全員一致で、本学位請求論文を学術的要求水準を十分に満たすものと認め、合格と判定した。